



# 介助犬を知っていますか？

2

## 在宅勤務

通勤の必要が無い在宅勤務は、頸髄損傷者の私にとって最適な勤務形態と言える。当時はまだパソコンやインターネットが普及していなかったが、電子メールを使って会社との連絡が行えた。

妻との二人暮らしで、日中は妻が仕事に出かけるため、一人で留守番しながら仕事をするようになる。コンピュータを使っているとよく物を落とす。指が動かかないためキーボードは手に巻きつけた器具に固定した棒で打つが、その装具を落とすと仕事にならない。フロッピーディスクも落とすと拾えない。本は重くて本棚から取り出すだけでも一苦労である。パソコンを崩し車椅子から落ち、そのまま妻が帰るまで何時間も過ごしたこともある。月に二回ほど、打ち合わせやシステムのセットアップなどのために出社していたが、在宅勤務では周りに同僚もおらず、家で黙々とコンピュータに向かう日々が続いた。

日中の数時間だけでも、ヘルパーさんに来てもらうことも考えた。しかし、私がいつフロッピーを落とし、いつ車椅子

から落ちるなんてことは分らない。ヘルパーさんに来てもらっても、頼む仕事が無いときもある。お金だっただけか。あれだけ望んだ在宅勤務でありながら、実際には問題点も多かった。

見かねた妻が犬を飼おうと言いだした。もちろん世話の出来ない私は反対したが、何かが変わるかもしれないとの期待もあり、盲導犬にも使われるラブラドル犬の子犬を迎えることにした。

シンシアと名づけた子犬は予想以上に可愛いものだった。一人でいる時間もシンシアといると気がまぎれ、物言わぬ犬が話し相手となった。ところが子犬はあつという間に大きくなった。台所のテーブルに置いてある私の食事を掠め取ったり、大事なフロッピーディスクをかじって壊したりと悪戯の限りをつくすようになった。

癒されるどころか毎日が、シンシアとのせめぎあいだ



った。後悔先に立たず、私たちは大種の選択を間違えたようだ。

ところが、妻が見つけた愛犬雑誌の「介助犬」の記事をきっかけに、イタズラ犬のシンシアが介助犬への道を歩むこととなる。

盲導犬が目の不自由な人のパートナーであるように、介助犬は身体の不自由な人の日常生活を手助けするように特別の訓練を受けた犬のことだ。立ち上がり・起き上がり時の支えになる、落とした物・指示した物をくわえて渡す、ドアの開閉など、障害者の障害の内容やニーズに応じて訓練される。

介助犬の訓練は、適性評価と獣医師の健康チェックをパスした後、一歳頃から



始まり、人間社会の基本的なマナーから、障害者に必要な介助動作の内容まで、半年から一年の訓練を積み重ねる。詳しい経緯は省略するが、生後



きむら よしとも 1960年大阪に生まれる。半導体製造会社勤務（コンピュータ・プログラマ）。日本介助犬アカデミー理事。財団法人ブラザー・コム評議員。関西学院大学非常勤講師。厚生労働省・介助犬の訓練基準に関する検討会委員、介助犬及び聴導犬の認定基準等に関する検討会委員、介助犬訓練者研修カリキュラム検討会委員、兵庫県・介助犬認定基準等検討会委員。著書に『介助犬シンシア』（毎日新聞社）、『介助犬を知る』（名大出版）。

七カ月であったシンシアは、適性評価、健康チェックに合格し、一歳になるのを待って訓練が始まった。訓練は順調に進み、シンシアは一九九六年七月に介助犬協会から日本で三番目の介助犬として認定された。落とした装具やフロッピーなどを拾う、指示したものを持ってくる、冷蔵庫につけたひもをひっぱりドアを開けジュースを取る、高速道路や駐車場で自動発券機から出るチケットを取るなど、私の不自由な生活を手助けしてくれた。

しかし、介助犬に公的な基準があるわけではなく、個々の育成団体が独自に認めているに過ぎなかった。当時、実働している介助犬は数頭しかおらず認知度も低く、ペット扱いされた。レストランやスローパーを利用する際に、「介助犬です。障害者の不自由な生活を介助してくれませう。ちゃんと訓練しているので迷惑をかけることはありません」と説明しても受け入れてもらえなかった。

私の不自由な生活を手助けしてくれるはずの介助犬が、社会参加を拒むバリアになってしまったのだ。 (つづく)